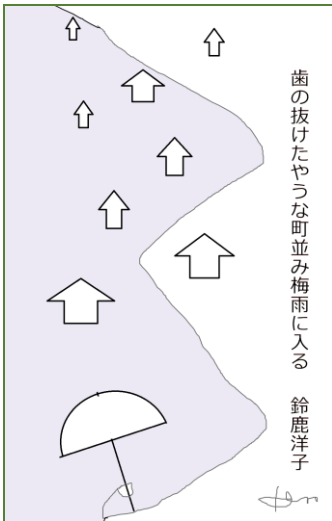




駅員の白き手袋夏燕

桑田愛子

駅員さんの白手袋が出発進行と指す方角に夏燕がすいすいと飛んで行く。緑したたる山を背景にした田舎の駅だろう。気持ちのいい風を感じる。



歯の抜けたやうな町並み梅雨に入る

鈴鹿洋子

人口が減少しつつある元気のない町である。「歯の抜けたやうな」になんとも言えない寂しさが滲む。「梅雨に入る」に陰鬱さもよく出ている。



ストライクボールの声も汗をかき

遠藤真太郎

草野球か高校野球か。この「汗」から緊迫感が伝わってくる。審判の声だろうが、「声が汗をかく」としたところがいいね。詩のある表現である。



たたかれて熟してあると言ふ西瓜

森岡香代子

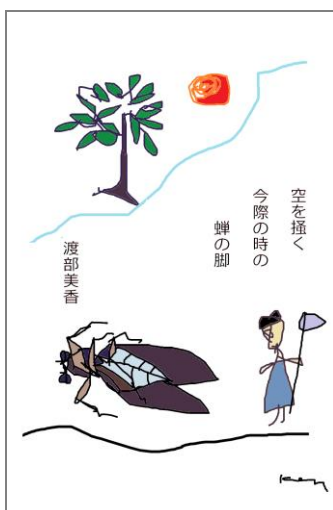
客が入れ替わり立ち替わりして叩いていく。音で熟れ具合を知ろうとするのだが西瓜にしてみればたまったもんじゃない。もう大概にしてくれい。



どの子にも愛を等しく軒つばめ

柳 紅生

「どの子にも愛を等しく」で人間のことかと思わせておいてタネ明かし。親鳥の立場になりきったから詠めた。「愛を等しく」の理屈っぽさもいいね。



空を掻く今際の時の蝉の脚

渡部美香

落ち蝉が仰向けになり、脚を胸に集めるようにして何かを掴もうとしている。地上に出てからは短い命だが、最期の瞬間まで生きていようとする。